

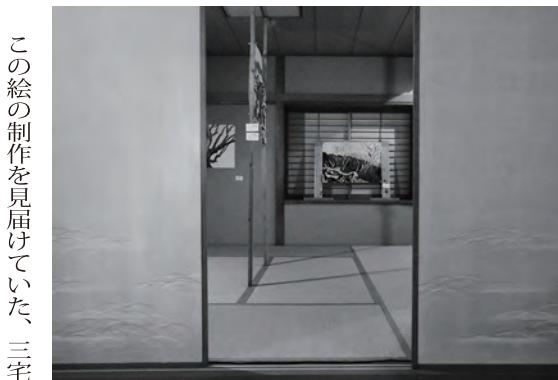
「生」と島。



2014年
(平成26年)
1月11日
土曜日

あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十七号



島大学の吉田武司氏にそのときの様子

この絵の制作を見届けていた、三宅島でよく見かける、火山で生を失った立ち枯れは、切なさ、はかなさを想起させる。青白く、血の気がない。しかしながら、「SHITORIJUNJA」という作品に描かれているものは、なぜか力強い。死んでいるのに、生きているようだ。たとえ生を失っていても、存在がそこにあるだけで、「生」を意味

豊かさ。
三宅島でよく見かける、火山で生を失った立ち枯れは、切なさ、はかなさを想起させる。青白く、血の気がない。しかし、「SHITORIJUNJA」という作品に描かれているものは、なぜか力強い。死んでいるのに、生きているようだ。たとえ生を失っていても、存

在がそこにあるだけで、「生」を意味することを示唆している。一見、矛盾しているようであるが、生は死をも含むことを証明しているかのようだ。間違いないこの島は生きているのだ。ひつそりとしている三宅島の冬。目には見えないものの、島の鼓動は確実に、高鳴っているのだ。ゆっくりと、熱が大地を駆け巡っている。

日比野克彦氏。芸大の教授をしている傍ら、三宅島大学プロジェクトにも参加していた。段ボールに絵を描くことで有名で、幅広くアート活動を行っている日比野氏だが、「場の力」においては、油絵の作品を展示している。これらの作品には、キャンバス地に印象に残った三宅島の風景が描かれている。自然の荒々しさ、静けさ、そして

古くから伊豆諸島の文化交流の中心で、地として役割を担つた三宅の地で、煎餅を作り続けて気付けば五〇年。素朴な印象を抱くこの店は、あえて人を引ひ込もうとするではなく、静かに

牛乳煎餅を彷彿させるような優しいものがあった。

吉くから伊豆諸島の文化交流の中心地として役割を担つた三宅の地で、煎餅を作り続けて気付けば五〇年。素朴な印象を抱くこの店は、あえて人を引き込もうとするではなく、静かに優しい安らぎを与える。その姿こそ、生きている証拠である。そう、確実に、この島は生きているのだ。

外の世界は、確実に我々の生活に影響を与える。その姿こそ、生きている証拠である。そう、確実に、この島は生きているのだ。



(小川健太)

私たちとは、人生の中で数多の人たちと接する。一期一会の出会いの中で、ひたむきな姿勢を誰かに傾けることは、数少ないのかもしれない。真摯に誰かのことを思い続ける姿が、この集大成には込められている。二人の中に紡がれたラインに、私たちは胸を打たれることだろう。

(深澤 匠)

一人の青年と、
一人の少年

ギヨロ目の牛の模型が二頭、私たちを待っているかのように置かれている。牛乳煎餅は、水を一滴も用いず、牛乳のみを使用していることが特徴である。何よりバター、卵などの乳製品の甘くほのかな香り、煎餅のサクサクとした噛み感えは、とても美味しい。

嬉いことは、お客様が喜ぶ姿です。つらいことや心配、葛藤などは全くなっています」と主人は語った。その流暢な話し方、併まいの中には、どこか

来る一月十二日、御藏島会館で一つのドキュメンタリー映像が上映される。その名も『ライン』。慶應義塾大学加藤文俊研究室所属の四年生、青山大毅氏が大学の卒業プロジェクトとして制作したものだ。彼はこの三宅島でひとりの少年と巡り会い、友達になつた。その少年のために、共に過ごす時間を一つの形に残した作品である。

一昨年の春に同研究室に入り、三宅島大学としてこの島に関わるようになった当時三年生の彼が少年と出会ったのは、同年の夏。その後三宅島に滞在する度、接してきた。釣つてきた魚を食べたり、島のことを話してくれたり。いつしか、一人の子どもの存在が彼の中にはなくてはならないものとなつた。少年にとつてもまた然りだろう。上映にあたって青山氏に話を聞くと、「この作品を通して、三宅島で出来た関係性を残したい」と語った。その眼や口調の端々に、熱源にも似た決意を見た。

私は、人生の中で数多の人たちと接する。一期一会の出会いの中で、ひたむきな姿勢を誰かに傾けることは、数少ないのかもしれない。真摯に誰かのことを思い続ける姿が、この集大成には込められている。二人の中に紡がれたラインに、私たちは胸を打たれることだろう。

